

大阪労山ニュースに随筆を書かないか？と機関紙部長の大西清見さんからお話をいただいた。せっかくの機会だから、中川の気持ちの中にあるヤマというものをいろいろな角度から出来るだけ楽しく「山楽（さんがく）」として見つめてみたい。まずは、ヒマラヤから始めよう。

山楽登山の世界 1 ヒマラヤ どこから来たんやねん？

OWCC 中川和道 20180322

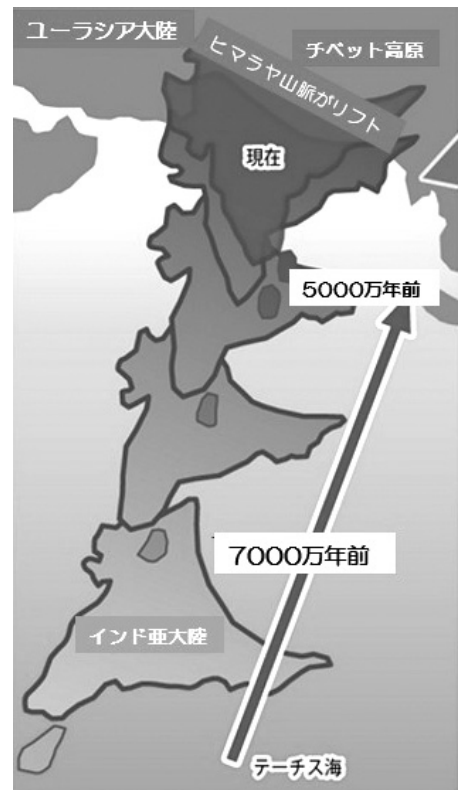
2017年8月、中川は初めてヒマラヤに行った。カトマンズの標高1500mは上高地カッパ橋と同じだ。涼しい山国かと思ったらこれがやはりとんでもない。カトマンズは北緯27度42分で奄美大島と同じ緯度だから標高1500mと言っても気温が高い。住居の庭先にハイビスカスが咲きバナナが生っていた。ネパール国南端近くに位置する標高250mのネパールガンジに行くと熱帯風トカゲの写真が撮れたほどの、何たる亜熱帯ぶりだろうか。この亜熱帯から南北の幅200kmを移動するだけで8848mのエベレストが酷寒の気候をもって控えているのだから、まるで突っ立った屏風だかダムだかのような高度差と気候の差がすごい。このすさまじい突っ立った地形は、いったい、どこから来たんやねん？まず、あらためて、そう感じた。

そう、ヒマラヤは、海の底から来たのだそう。エベレストのイエローバンドは海底に積もった生物の死骸からできた石灰岩が大理石になったものだという。少し調べてみよう。

古大陸パンゲアから分かれた Gondwana 大陸から生まれたインド亜大陸が7000万年前には図(Wikipedia「インド亜大陸」から引用)のとおりユーラシア大陸に近づき4500万年前にはついにユーラシア大陸に衝突して地下にもぐりこみ、海底が持ち上げられてヒマラヤ山脈になった、と地球科学者たちは信じている。

井上ひさし原作の人形劇「ひょっこりひょうたん島」では海を漂流する火山島で個性あるキャラクターたちが奇想天外な物語を展開する。おいしい、Gondwana 大陸やインド亜大陸は、ひょうたん島より圧倒的に大きいぞ。ヒマラヤの生みの親 Gondwana 大陸には、ユーラシア大陸にはいなかった生物たちがいた。彼らが、インド亜大陸に乗かってやってきたのなら、それこそ奇想天外な生命の営みが持ち込まれたはずだ。そう、彼らの営みはヒマラヤが作り出した独特のモンスーン気候に乗って、東へ東へと移り、悠久の時を経て、何と、日本にもやってきたのだとか・・・

彼らが繰り広げた生命のドラマ、ヒマラヤが作り出した地形や気候、そんなものを次回は見てみよう。



インド亜大陸の旅。Wikipedia「インド亜大陸」より

続く

